

九  
一

奇談

卷之二

百  
文

## 遠山寺藏卷之二

## 第六章

秋葉山奥院の事。古文書と云ふ。元和五年正月一日  
至一毛水みね算年々をめりてより

秋葉山奥院の事。古文書と云ふ。元和五年正月一日  
至一毛水みね算年々をめりてより

まどつたりかあくありうて日ひをすれをまわせ  
「ううれど。そ多く三月より十月まで

と彦い。まうひて告教とすうた。ふるげに表れと  
始のうふ血へやう。又うりぬり七月ひとせき。

三月より六月は小退と端うれてまうちがじとうえ  
改付候。始むとすうてそえよたれく。本音  
と角むし發へり。拂とけり。ふきとひはせたうなふ

○遠山寺藏卷之二

水と音とをも。おひなすけうへう音と  
とほりとも今がれ候不せのうふかと得典がちく  
てやかんる石とよき太きうる巻うきふせんの方の人  
すりうけ旅附とくゆくゆくちく人處を雪附うきふ  
せのうふはれうと休息不くよき又をあらふ西の川ほ  
とくみて石壁うちり。うきがふきの雪ふ用うなうせん  
せり。夷れで水すりをどするもの。がらふ難とえもまぐ水  
一湯もうす玉手すり巻の平うすふ一毛水とり森水う  
ふすとねて松井の凹と森水とすすらすく  
体ととてとじてとせんふ帶てますか。一毛水た

○吉と山寺後卷之二

一〇

かとをり生むり身も人間す／あつて何事もあ  
一洞をうもれ持て深宵隔夜は行幸も一吹ふ  
えと十挺（一筋ふうもく）平生のりづきも殊所善まると也  
れ生すにあらゆるにむかて諸之源山の荒業  
跡（アカシ）又へかく此跡つねよもんがた跡をよる處をじよが  
跡のにまどりとひそむふれ爲く跡うや畢竟跡  
とつをもり更にさふ跡う一見と葉のりづに看ばると  
もてちかくおまひけえるるとほのどくすら表と登  
あれば山王の荒（アカシ）つゝまみの圓水うれば行幸までうる表  
をすくめぐれんとてあそびけ跡門とつむ八半身（ハーフシム）  
○至山表卷之二 ○三

大寒丸枕のあくさまひ黒闇とくも夜すけたまうまひ  
がもゆぐれたりとせりとくがて此表の立まび／＼もとと荒  
とくまむりとく入でふりよ／＼せがまくした表づる娘祖  
とすとく／＼ゆふきがてうだ五六ひすう纏ふ繕とつて  
表角ス木うもふうりニまふしてよすりもとがくと  
うのりか／＼大指ミ／＼うらがまよひたととと太中もとひも  
表をすとくあ／＼あり／＼とくの新木の多様のどくゑ  
ねとすり／＼すもあすりと無事と切つとせよにけの  
ひなじもすとれてたゞつにあは／＼と檢地を計  
つりりとおけよと樹の大木とあすと日記一卷

○孝子傳卷之二

C  
三

一のねすりとせら室  
日每(ひまいづ)は人のまゝ  
セラ室(せらむろ)と櫛(くし)あり又櫛(くし)の木(き)二本(にほん)アリ  
先(さる)の娘(むすめ)者(わざ)と聲(こゑ)と  
つ(つ)の(の)てたれ(たれ)と(と)うじ(うじ)と(と)うじ(うじ)  
娘(むすめ)ふ(ふ)そ(そ)立(た)本(もと)ふ(ふ)お付(つ)け(つけ)の(の)そ(そ)と(と)股(もも)付(つ)け(つけ)又(また)六(ろく)丁(ぢ)と(と)て 大(だい)木(き)  
そ(そ)そ(そ)そ(そ)そ(そ)そ(そ)娘(むすめ)と(と)娘(むすめ)と(と)娘(むすめ)と(と)娘(むすめ)  
の(の)木(き)の(の)木(き)の(の)木(き)の(の)金(かな)の(の)幣(ぬい)一(いっ)千(せん)の(の)木(き)の(の)  
幣(ぬい)の(の)木(き)八(はち)千(せん)の(の)木(き)二(に)千(せん)の(の)木(き)全(ぜん)ま(ま)  
た(た)木(き)一(いっ)千(せん)の(の)木(き)三(み)千(せん)の(の)木(き)新(あたら)く(く)も改(か)め(め)の(の)木(き)  
と(と)りふ(ふ)と(と)りふ(ふ)と(と)りふ(ふ)と(と)りふ(ふ)



うへ不圖こどもね年うも立つのへつまうべ  
あらへ全くひかのまへわうつてどきはくおとくえふ  
とくわくへむかひのひも木うねがわくよくとくせ  
アキヤうんうとあくよし生れかへてどさり  
くふえじりくにそ本へたりともうふくの  
やうやうの想と本うけよみう虎のるにとくじゆ  
うるくよし御茶つすむたうふく(因連一)えくふれも  
あ付てうれえをうるくよ大おとくうお間づらの娘姐  
とくえうう(因連二)おとくうおもあうやうりうへ難あつ  
ううわくおとくうおもあうやうりうへ難あつ

歌  
う  
ざ  
う  
さ

○毛山考略卷之二

人

○ やへ章 例へにトモ一節  
ふ中へあての蟹とくじて申の列（よし）とすとまへ莫體（またい）  
アレくうれがとくの富掛（とみかげ）のとけり水まるとう方考（かんこう）アリ  
一石（いっせき）アリ（あり）とくつるかなあり木の波（なみ）アシと着（き）  
立木（たてぎ）アリ（あり）着（き）づるやく挂（つる）けすう毛（け）はいのめが在（あ）る  
ぞくすアリ（あり）もといたアビリとて答（こた）へあらす休（やす）木（き）木（き）  
と多くらつめをもろ水とゆきりとくとくとくらかども  
ひびきのつれかども湯（ゆ）あびよどく牋（しゆ）をとこばね半（はん）身（み）をもと  
て室（むろ）へ湯（ゆ）あびよどもそそ黒（くろ）の窟（くつ）へう汲入（くきりゅう）のせられ

ノホヅモとて焼石とうちこころに近づく所に陽と  
水を平手のせの手てうきよのはれとこすれて  
まく無じた歎ながれりとくらむれば皆と爲  
めに、とひの間をすりあひるはげて  
よく西かと燒きてあはくちとて  
はれうがいとふ持人をのつれも  
か乳もされが筆へ筆をまつて筆をどま  
くらん楚やとはまくとて新とあら大と一  
たてにわが乳くとまくとて新とくらま  
せまかんと狼うが筆をかかへてうだふき  
○毛山毛来之二

○六

ノホヅモとて焼石とうちこころに近づく所に陽と  
水を平手のせの手てうきよのはれとこすれて  
まく無じた歎ながれりとくらむれば皆と爲  
めに、とひの間をすりあひるはげて  
よく西かと燒きてあはくちとて  
はれうがいとふ持人をのつれも  
か乳もされが筆へ筆をまつて筆をどま  
くらん楚やとはまくとて新とあら大と一  
たてにわが乳くとまくとて新とくらま  
せまかんと狼うが筆をかかへてうだふき  
○毛山毛来之二

アリトトモのつれどもよしとひやんむすび  
たりと身を守安法のまちまわどれ安うぬすりそ  
まめあがれあくとねゆらかくぬづくもくらうら  
やがくのまことまにまくふたふすりまくばきまくはや  
いとまとまておひまくまつりたう太養ちひそくば  
のんとはまきまきとまくへ眼の光長まくまくまく  
まよすりまの太サル人せかよもくたり用ひるばの  
太サル元四矢りどもすりえん管くこれとくまがのけ  
ハナガラム歎ねじえとくろくなちに仰面さげせ  
キハナガラム歎ねじえとくろくなちに仰面さげせ



○そと山集卷之二

あうへふあうへやまじんがおなまふ  
いやらふやうべみ蠻蠻へつめのが氣とてへあと  
引あゆみ和歌ひまくとて例とつむつあくの氣に暮  
づる付氣うどつとすよ爾用意よ爲せぬ夕け暮  
もたの風う付うり空て氣と吹みてりゆるをあし  
あひびき音のむかうすとくわいの令加處力  
さんとさげゆもきらくも又そしも放へせが大  
堂の木とすくとせらすれや我キ育ふば倍佛邊の  
そくひよてもうびさればづれも皆持反ぞれし角  
かねばくも嘆惜すひうつてもう一都てせのことをいと

拂へたりと之をかく拂ひきぬはあらうとて拂拂ひぬ

○第九章 大本のとく見付へる事  
大弓を引く 二尺引の縄

太本ノトノ足付ノノサニ  
太手毛アリニテ前ノ縫ノ

9

まじめの山へ向かふ間とまうやんとまうふ

そりすに深谷由志古本二本とうらふ枝ともい

檜木 お日雇と先づにはゞくからに又

雅語とく書う。徳とけす。うの御前とゆけば文本

所が、着火のところを、手でさばく。

はるかと春がめでて春易きへりてあたまか  
よし

事と行合ひされと努力せつあらのやうなに爲め

○毛山考證卷之二

九

りひらふりうき大木すり日向一太八郎みすと七五九あまりうき

大木うらや（松平家）のよしもとへは木の根あらうりて松木

ふてやうさんと競ひ同舟となりて舟をかくすされば喜

や大枝の木もよりにん大枝をも実一丈余りに

まかく船づりがね年よりては深山のあらわる處に定

ううせふすゑうどりのうんとかうぬけ本ほに用あざ時材はうたらぶ長さ九寸にうる

四尺二寸厚さ二尺余分なまこ板より一枚  
一枚大判墨ふろうたうは、それより一の板よりうまで大本丸づれ  
一丈二尺

七弓余り下されまくと付まつて餘程とゆに爲せ

後うる年うる大半よもや一ひまみ三尺余の丸鏡すり鑄くも

海の旅は度々あるが、いよいよ此

卷之十

○毛詩卷之二

おひのどの間（あひのま）延びせられていはく、史と力とする  
うちかたそれが本もとゞ燒火（やかべ）これと云つだ。  
夜あら暮（よふゆ）と云ひ、本ものと云ふ所に、其の被事（ひじごと  
りとせんと欲（がほす）て見られ難難（なんなん）のうどくねど  
此（みよ）ぞ宿（しゆく）智（ち）くあらうれめまうるゆ（めまうるゆ）や、とおきみ  
しもむらうゆふ止（とま）め、本（もと）の御（みやび）事（こと）アリて  
一車（いちしゃ）と仰（あお）ぬあふ程（ほど）も色（いろ）あらうやと小（こ）きのみの  
小（こ）細（ほそ）一（ひと）身（み）アラシテ、さび延（のぶ）雪（ゆき）のととけろ（とけろ）と立（たつ）あらう  
やがふ大（おほ）木（き）アリ、したるあるじ、これも一（ひと）身（み）アラシテ、さる  
を立（たつ）あらう、誰（だれ）と云（い）ふと云（い）ふと云（い）ふと云（い）ふ

ひづれ此日をひたに入る多幸すがれふ様あれ  
とおもて通とおのどく送りねる  
よ大介とまで代道ふ儀にくくちりておん  
ほとしうふわうだやけ火本の薦し持む  
よとくおとげを教參すとよとくを  
よ木の下に火あつて織に都ふと六月御臺  
の音うびと一ふ会せしるよと音くおそれねば  
強氣うほもそれらへ聲くあり是とすとじて  
ふうとすとすとまのとておはげと遙く  
音くやうふうりも波と焼物本と名付へば本の  
音くやうふうりも波と焼物本と名付へば本の

○山寺集卷之二

○土

よとくりりよとけわむとゆくと身のもよどむ  
よとくりよとけわむとゆくと身のもよどむ

丁珍木之圖

